

授業研究部会

実践者と研究者による授業研究のプロセス Vol.1

Lesson Study Process by Art Education Practitioners and Researchers Vol.1

畑山 未央

HATAYAMA Mio

東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 博士課程

Doctoral Course The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

1. 愛媛大会からのつながり

突如として我々に突きつけられた「新たな日常」は、授業研究の当事者を限られた状況下で試行錯誤する“Do See Plan”の渦中へと誘い、誰しもが「研究者としての実践者」であることを一層自覚する契機となった。愛媛大会では、COVID-19 終息後も続いていく「授業実践と学術研究を繋いだ共創」への萌芽的機会とすることを目的に、9名の学校現場の先生方を迎えて授業研究における理論と実践の関係性や往還の考え方を模索する議論を展開した¹。愛媛大会の参加者からは、現場の先生方の熱意や授業の創意工夫などから多くを学べたとの感想をいただいた。同時に、今後は学校現場での問題意識に焦点化していきながら、具体的な視座での授業研究の追究が望まれることも確認し、当部会の今後の方向を照らす貴重な場となった。

2. 東京大会における射程

(1) 共同研究プロジェクトの発足

愛媛大会での議論を踏まえ、当部会では、小学校・中学校・高等学校の9名の先生方との共同研究プロジェクトを始動させる。共同研究プロジェクトの立ち上げに際してスポットを当てるのは、先生方が日ごろ抱いているリサーチ・クエスチョンである。この「研究上の問い」から設定されたオープン・エンデッドな研究課題に対して、複数のチームから成る継続的な共同研究を約2ヶ年かけて実施する予定である。

2021年度の東京大会では、今後の共同研究のあり方、問いの意義や課題などを議論の俎上に載せ、フロアーの皆様とともに来年度以降の取り組みを見据えた展望を開きたい。

(2) コアメンバーの新規加入と調査研究

2021年度より、授業研究部会のコアメンバ

ーに新たなメンバーが加わっている(竹内晋平／奈良教育大学、藤井康子／大分大学)。両氏は、直近15年分の美術科教育学会誌全論文(No.27-42, 全546篇)の概要分析を通して、「授業研究史の俯瞰」、「実践と理論の往還」に関する調査研究を進めている。今後も共同研究プロジェクトとの関連を図りながら継続的に取り組んでいく。東京大会では、調査の概要と今後の指針について報告する。

3. 2021年度 授業研究部会 開催概要

◆開催日：2022年3月5日(土)

◆開催時間：17:00～19:00(2時間を予定)

◆方法：Zoom ミーティング(事前申し込み有)

◆プログラム(予定)：

時間(120分)	内容
17:00～17:15	開会の挨拶と開催趣旨等のご連絡
17:15～17:45	授業研究部会コアメンバーの新規加入のご報告と研究活動について
17:45～17:55	共同研究プロジェクトの概要説明とプログラム後半の流れについて
17:55～18:00	休憩
18:00～18:40	3チームに分かれての発表と質疑応答(※チームごとにブレイクアウトルーム) ①「授業研究・課題意識の立て方と実践」 《登壇者》野田洋和先生(川崎市立川崎総合科学高等学校) 山内佑輔先生(新渡戸文化小学校) ②「子供の内的変化・教科の特性を捉える研究手法」 《登壇者》栗津謙吾先生(成城学園初等学校) 長尾菊絵先生(国立市立国立第二中学校) ③「実践研究から導き出される学術研究との比較」 《登壇者》平田実先生(福生市立福生第一中学校) 湯瀬明恵先生(川崎市立渡田中学校)
18:40～18:55	全体共有、総括
18:55～19:00	閉会の挨拶、事務連絡

当部会の議論で対象とするのは、「(成功例としての)研究成果」だけでなく、寧ろそこに至るプロセスである。すなわち、「授業研究上の迷い」、「試行錯誤」、「仮説と検証のプロセス」などの課題解決のサイクルを取り上げ、日々我々が意識している子供のための授業研究とその問いの意義を共有し、フロアーとの議論を通して深める機会を創出していく。

(文責：授業研究部会 事務局 畑山 未央)

¹ 「令和2年度 研究部会活動報告 授業研究部会」, 美術科教育学会通信 No.107, p.22